

# 森立之の生涯十一

## 立之の死とその後

森立之(1807～1885)

明治十八年 一月 大蔵省印刷局罷役。

夏、喉頭癌を病む。

十一月二十五日 誕辰(誕生日祝い)の宴・日本橋三文楼。くじ

引きで、来客に蔵書を与えた。参加者は今村了庵、遠田澄庵  
ほか。

十二月六日夜八時 枳園没る。目白洞雲寺に葬らる。(後、寺は大  
正二年に池袋三丁目に移転)

「枳園は十二月六日に水谷町の家に歿した。年は七十九であつた。枳園の終  
焉に當つて、伊澤徳<sup>めくむ</sup>さんは枕邊に侍してゐたさうである。印刷局は前  
年の功勞を忘れず、葬送の途次棺を官衙<sup>ちか</sup>の前に駐めしめ、局員皆出て  
禮拜した。枳園は音羽洞雲寺の先塋<sup>せんえい</sup>(塋は墓、先祖の墓)に葬られたが、  
此寺は大正二年八月に巣鴨村池袋丸山千六百五番地に徒<sup>うつ</sup>された。池袋  
停車場の西十町許で、府立師範學校の西北、祥雲寺のである。わたく  
しは洞雲寺の移轉地を尋ねて得ず、これを大槻文彦(森約之の妻・大槻  
氏陽の兄)さんに問うて始て知つた。寺には枳園六世の祖からの墓が並  
んでゐる。わたくしの参詣した時には、おくわうさんと大槻文彦さん  
との名を記した新しい卒塔婆が立ててあつた。

枳園の後は其子養眞の長女おくわうさんが襲いだ。おくわうさんは女  
流画家で、浅草長住町の上田政次郎さんと云ふ人の許に現存してゐる。  
おくわうさんの妹おりうさんは嘗て割鬮氏某に嫁し、後未亡人となつ  
て、浅草聖天横町の基督教會堂のコンシエルジユになつてゐた。基督教徒  
である」 (「澀江抽齋」その百八)

枳園の水谷町に居りし時、家族ハ養眞の未亡人(大槻氏)と、孫女とのみであつた〈鑛〉。今ひとりの孫女ハ向島辺の醫師に嫁して居た〈柳〉。

〈澁江保「森枳園傳」61頁〉

明治十六年十二月二日、私の兄矢島優が死んだ時、私ハ其の死屍を引取つて、宅から感應寺へ埋葬した。其の時、枳園ハ弔ミに来たれど、諧謔ばかり言つて居た。デ私の母ハ、

『ドウモ森さんハ冷淡でいかん』

といつた。けれども其の翌十七年二月十四日に私の母の死んだ時、やはり枳園ハ弔ミに来たが、前年の、兄の時とハ雲泥の相違で、私に向つて、自分が往時一と方ならぬ世話になつたと、妻ば議論を戦はせたとなどを述べ、阿母さんハ実に貞女で、女丈夫で阿つたなどと述べて声を震わせた。私ハ枳園の態度の此の時程厳肅で阿つたのを見たのがなかつた。

枳園ハ得能の言を信じ、一生買殺されたつもりで安心して居た。ところが不幸にして得能に死なれたために、折角の約束も画餅に属し、遂に印刷局の雇かれた。

明治十八年十月五日のとで阿つた。枳園が私に書を寄せ、

少々御相談致度有之、何日何時に参上致バ■宜しキヤ、

と書來つた。当時私ハ芝區櫻川町十八番地に住し、京濱毎日新聞記

者で阿つたが、折悪しく社用で一週日程不在で阿つた。同月十日に  
帰宅してみると、留守宅へ此の郵書が着いて居た。で直に郵書を発  
し、

明朝此方より御伺■■■■候

旨通じ置き、翌朝(十一日朝)約の如く訪問した。

スルト、

『実ハ遊んで居て困まるから、社の方へ話して、演劇欄を受け持た  
せて呉れよ』

と依頼で阿つた。無論私ハ斡旋の事を承諾した。そして即日其の趣  
きを社へ通じ、見本として二三の文章を交付した。しかし折悪しく  
翌々十三日に社用で遠州へ行かねばならなんだ。勿論遅くも一週日  
目にハ帰京の豫定で阿つた。デ枳園に向つて其の事を告げ、且つ

『私が帰京次第、屹度吉報を耳に入れます』

と受合つた。ところが遠州へ行くや否や、濱松から犬居へ廻はると  
なつて意外に日子を費した。デ帰途を急いだために掛塚から豊川  
丸といふ汽船に乗込むと、今度ハ暴風雨中に汽鐘を損じ、それや、  
これやで抛なく暫らく下田港に逗留し、ヤツト帰京したのハ、十二  
月十六日で阿つた。スルト留守宅へ、枳園が六日に没した(と)いふ通  
知が来て居た。私ハ此の状を見て眞に慙然たらざるを得なんだ。

嗚呼、父の友人、多くハ私の知らぬ以前に没し、生存して居たのハ、

海保、小島の兩先生と、伊沢、岡本、山田と枳園との數者に過ぎな  
んだ。海保小島ハ私の先生で阿つたが、其の他の人々で伊沢ハ夙に  
私の七歳の時(文久三年癸亥)に没し山田ハ温厚篤実の君子だけに、何  
分氣が詰まつて寄り附かれず、岡本ハ九十の老人で相手にならず、  
只近づき易かつたのハ枳園と栗本鋤雲とのみ、就中枳園ハ或る点か  
ら言へば、全く友人のやうで阿つた。

〈澁江保「森枳園傳」53〜59頁〉

第二次世界大戦前 矢教有道(やがすゆうどう)(湯液治療家)が、「素問」が輕視される傾向に警  
鐘をならし、「素問」にかんする多くの論説を發表した。

1945 昭和二十年 立之の多くの自筆稿本が安田文庫(松廼舎文庫)に所蔵され  
ていたが、第二次世界大戦の戦火によつて失われた。(石田肇)

安田文庫…二代目安田善次郎が、本所横網町の自宅敷地内に建てた文庫。前期は  
松廼舎(まつのや)文庫、後期は安田文庫と称した。不運に両文庫は災禍で焼失している。

松廼舎文庫は、東京・本所横網町の安田家本邸内にあり、彼の号「松廼舎」が文庫名と  
して使われた。江戸文学、殊に歌舞伎・能楽の珍本を主とし、広く名家の自筆本や短冊類  
にも及んだという。これら全ては関東大震災の劫火で邸とともに灰となった。また、安田  
文庫は大戦のため灰燼となった。

1965 昭和四十年 丸山昌朗(1917-1975)が自著の「校勘和訓 黄帝素問」  
をテキストとして、月一回の「素問」講義を開始した。これは百年ぶ  
りの「素問」の講義だった。

※このとき医史学者の石原明が丸山昌朗に、江戸末期に森立之という  
すぐれた内経研究家がいたということを伝えていた。丸山は、大塚敬  
節所蔵の森枳園著「内経要字苑」(立之が作った素問・靈枢中の重要語  
の索引)を復刻して、立之の業績の一端を世に示したが、「素問攷注」  
を見るまでには至らなかった。

1978 昭和五十三年 医史学者の小曾戸洋が、国立国会図書館に出かけて  
古医書を複写するようになり、立之の著書に心を奪われるようになった。  
(学苑出版「素問攷注」小曾戸洋序)。



- 1984 昭和五十九年、丸山昌朗の流れにある井上雅文、岡田明三、嶋田隆司、左合昌美らが、原塾を結成して井上が「靈枢」を、島田が「素問」を毎週講義することになった際、島田隆司がはじめて井上雅文の所持していたコピー本の「素問攷注」に出会っている。(学苑出版「素問攷注」嶋田隆司序)
- 1985 昭和六十年 森立之手抄本「素問攷注」の影印本(写真版)発刊(オリエント出版)
- 1986 昭和六十一年十二月、洞雲寺で没後百年忌祭が開かれる(小曾戸洋)
- 1997 平成九年 翻稿本「素問攷注」発刊(日本内経医学会、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部 共編)

学総合研究所医史学研究部 共編)

### 翻稿本「素問攷注」小曾戸洋 序文

(日本内経医学会、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部 共編)

森沢園先生の讐咳にはむろん接したことはないが、先生は日頃、私が最も畏敬し、信愛し、私淑してやまぬ心の師である。その学識の深さは深遠さは、私など到底及ぶべくもない。ただ、森先生の学問は深遠で自分などとても及ぶくもないという事実を、現代においてつとに悟ったのは私かもしれない。そのことだけは内心誇りに思っている。……

本書の底本となった森先生自筆稿本の『素問攷注』は国立国会図書館の所蔵品である。私は昭和五十三年からしばしば同館に赴いて、所蔵の古医書類を複写するようになった。……五十五年十二月から翌年一月にかけて数度分けて『傷寒論攷注』全三十五冊を複写。これを読んで強い衝撃を受けた。正直いつそこれまで目にしてきた古典解説研究書のほとんどが霞んで見えた。

……当時私は二、三名の同志と協力して、『太素』『甲乙經』などを含む『東洋医学善本叢書』の編刊作業に専念していた。『素問攷注』を見ると『太素』をはじめ、幕末までに発見・整備された書誌考証学の成果が余すことなく発揮され、活用されているのではないか。ただただ驚嘆し、敬服するのみであった。この凄さには、たとえ何度生を受けようと及ぶくもない、と。

私はさかんに周囲に森先生の凄さを説いて回ったが、当時森先生の真価を理解しうる人はさほど多くはなかった。……

私は森先生の菩提寺である池袋の洞雲寺に墓参を重ね、……同寺で森沢園百年忌祭を挙行了。私は「森沢園の遺業」と題して講演し、『素問攷注』『本草經攷注』『傷寒論攷注』の偉大さを力説したが、期待したほどの反応はなかった。私は幕末考証学は古典医書研究において卓抜した成果を収め、今日に至るも本家中国をはるかに凌駕する水準を極めたと断言してはばからぬものである。私が『素問攷注』に接し感銘を受けたのは二十歳代のおわりであった。いま知命

の齡※に近づきつつある。この間、鍼灸古典籍に関する研究熱はとみに盛んになった。その時運こそが本書の出版を生んだのである。まさに隔世の感がある。……

※ 知命……論語・爲政「五十而知天命」

右に掲げた日本内経医学会と北里研究所による翻稿版(活字版)『素問攷注』の編刊の実務に携わったメンバーによる報告を引いておく。『医道の日本』平成10年5月号に掲載された一文だが、小曾戸洋先生の力説にもかかわらず冷淡だった反応が、平成10年になると、一気に熱を帯びてくる様子が読み取れる。

## 『素問攷注』

### 翻字刊行報告

編者を代表して 宮川 浩也

この度、幕末の医家、森立之(一八〇七―一八八五)の『素問攷注』を翻字出版した。三月十五日、菩提寺である池袋の廻雲寺を訪い、墓前にてこれを報告した。これをもって『素問攷注』翻字刊行作業にピリオドを打つことにした。

平成八年四月にチームを結成してから、ちょうど丸二年で成果を得ることができた。総計六六万字、その一字一字をコンピュータに入力し、校正し、さらに出典確認、外字作成などの難しいハードルをクリアして成ったものである。作業の詳細を記すことは、辛いことしか思い出せないなので、これは省略する。

ここ数年で、『素問』の善本が用意され（『素問・靈枢』日本経絡学会）、索引が備わり（『素問・靈枢 総索引』日本内経医学会）、そして最もすぐれた注釈書が翻字出版されたことを考えると、国の内外の『素問』研究者にとっては至福の極みである。それもCD-ROMでも利用することもできるのである。数年前まで考えられない垂涎の研究環境が備わったことになる。

これほど優れた『素問放注』も、時代的には反故に等しく、当然ながら陽の目を見ることはなかった。国立国会図書館（千代田区永田町）に現蔵されているが、よくぞ保存しておいてくれたとしかいいようがない。

この注釈書に最初に着目したのは、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部部長の小曾戸氏である。寄せて戴いた序文によれば、昭和五十三年（一九七八）頃から盛んにその優秀性を説いて回ったが、少しの反応もなかったとのこと。が、今回の翻字版は予約販売の段階でさえ大いに迎えられたから、この二十年間で確実にレベルアップしたことは間違いない。

没後一〇〇年を記念して刊行された影印本は「こんなにすごい注釈書があったのか」と驚きをもって迎えられた。何部かの寄贈本によって中国においても認められることになり、最新の注釈書にすぐさま引用されていた。



## 孫娘鑽の追悼文

立之が晩年最も愛したのが、約之の遺児、すなわち立之の孫娘、鑽であつた。『自作壽藏之紙碑』の末尾には鑽がその四十九日に当たつて祖父立之を追悼する跋文がある。ここで孫娘の目から見た立之を見ると、さらに立之という人間が立体的に浮き上がつて見えるようで興味深い。

おほち(大父||祖父)のきみの印刷局に出てつ可へられしハ、七十阿ま  
り三ツ乃とし野(の)をりなりきそれよ里つかさ(官)の津とめにいそし  
まれて、七とせを扁(へ)たまひぬ。やうやう年たけ多まひぬればとて  
こそ(去年)の一月に休養のおほせをかうふり家にゐて、しづかに月日  
をすぐし給ひしかその年の十二月六日といふ日につひに身松(ま)か  
り給ひぬ齡は七十九にておはしまし、とし比(ころ)博く此学びをし  
(識)れし中にも本の草の学を旨と極めたまひ世の神農本草經のみだ  
りなるを修めたゞさんとて、数年のひまをおし、たまひその事つひ  
に成りて安政の初乃年にえりまき(彫り真木||刻版)とさせ給ひしが  
いぬる(去る)としその版ゆくりなく火に失せにき古れを惜しみたま  
ふ心のやるかたなさにその後再び板にのぼせて又志をとげ多まひぬ  
かくころをこめられし書なれハこれそおほちの(きみ)の御靈とも  
見つへきものなるとて七七(四十九)の忌日にそのとちふ(綴文||書  
物)をまた作らせて、おほちのともがき(友垣)をし(教)へ子の人々にお  
けおくりまゐらせ又みつから物せられし壽藏の紙碑をもこれに添へ



これをもて世になき跡を弔らひ奉る志るしとす阿にかなしのことや

なき人の阿ゆみを古ひし百草の

△道△の文こそかたみなりけれ

明治十九年一月二十四日

枳園孫女 くわう

## 森 枳園 壽藏 碑 再 訪

さて、第3回の当講座(2020年九月)で立之の壽藏碑を取り上げた際、私は壽藏碑の裏面だけを取り上げていた。というのも、この「壽藏碑」が彫つてあるのが立之の墓石そのものであり、まさかその左右の側面にまで字が彫つてあるとは思っていなかったからなのである(この時の参詣は2014年4月)。

その後、2020年12月に再度墓参した際に、はじめて左右側面に彫つてある文字に気がついた次第である。急いでその文字を写真に撮り、裏面も再度撮影し直そうと考えたが、それは叶わなかった。墓の後に木が茂り、撮影できなくなっていたからである。また六年前に比べて石の風化も進んで、そのうえ苔も生え広がっているのだった。俗に「掃苔」という言葉があるが、この言葉にしたがつて苔を掃えば、石もろともに文字も崩れ去ってしまうことは明白だつた。しかし第3回講座の面目を払う意味で、この講座の最後にあらためて全文を録しておく次第である。

2014年4月



2020年12月



## 森 枳 園 壽 藏 碑

□は判読不能の字   △は未詳の字

### 左 面

立之、字は立夫、枳園と號す。□文化四年江戸八疇に生る。伊織、後に養真と改む。父は福山侯の醫員為り。文政四年父を喪う。時に年十五、父を襲いて名改まる。稚き養竹も又醫を以て仕う。天保八年、故あつて禄を失う。祖母慈母及び妻子を携え相模に遊ぶ。祖母は浦賀に在りて歿す。遂に大磯、大山、日向を歴て津久井縣に至る。

此の間十二年、辛苦は勝げて言うべからず。然れども樂も亦其中に在り。何となれば半ば儒、半ば醫を為し、居すれば則ち教授を以て業と為す。然く奇書を讀み好んで異聞を聴き、出ずれば則ち手に刀圭を握り、内外二科は無論のこと、或は收生を為し或は整骨を為し、治を請う者には施術を施さざるは莫し。

### 裏 面

實事求是、發明頗る多し。又山に入りて藥を采（採）り、溪を下りては魚を釣る。桂川詩集有り、遊相医話有り。其の行樂中、正名學に於いて裨益有らば一々筆録し以て後放に備（備）え、既に一百餘卷に及ぶ。其の他、本草經、素、靈、四時經、傷寒、金匱、扁鵲傳、奇疾法、並びに放注を為す。弘化五年五月、本藩の赦しに遭い江戸に再来す。十月幕府の命を奉じて、千金方を醫學館に於いて校勘す。



功<sup>おほ</sup>竣りて銀若干を賜わる。嘉永七年、擢<sup>おほ</sup>かれて醫學館講師と為る。  
安政五年十二月、初めて將軍徳川家芝公に謁す。萬延元年九月、醫  
心方校刻成るを以つて又銀錠を賜わる。元治元年、学館講書の功勞  
を以て月俸を賜わる。慶應四年七月、福山に移居す。明治五年五月、  
東京に入り文部省十等出仕に補さる。後、或は醫學校に入りて編書  
を為し、或は工学寮に入りて講弁を為す。

## 右面

十二年十二月、大蔵省の撰に應じ印刷局に入り編輯を以て務と爲す。  
老の將に至らんとするを知らず、殆んど金馬門<sup>な</sup>※の想を作し、以て銘  
に代えて謂いて曰く。

萬卷の架書貧を識らず 欣びに堪へんや※、恩澤微臣に及べるを

花前月下に餘樂存り 杯に新<sup>しう</sup>筍有り盤に鱗有り

明治辛巳秋日

七十五翁養竹子記す

明治十八年十二月六日歿年七十九 門人 岡寛齋※謹書

※金馬門・・・漢の未央宮の、学者・文人が出入りした門。史記・滑稽傳・東方朔に下のようにあり、立之は印刷局で古書に囲まれ、金錢の煩わしさから逃れる自分の姿を東方朔に重ねたのだらう。「古之人乃避世於深山中、時坐席中酒酣、據地歌曰、陸沈於俗、避世於金馬門、宮殿中可以避世全身、何必深山之中、蒿廬之下、金馬門者官署門也」〈史記126・滑稽傳・東方朔〉

明治十二年十二月一日、立之は大蔵省印刷局編修の任に就いたが、その時の記述として『濠江拙齋』に下のようにある。「身分は准判任御用掛で、月給四十圓であつた。局長得能良介は初め八十圓を給せよと云つたが、枳園は辭して云つた。多く給せ

られて早く罷めさせられむよりは、少く給せられて久しく勤めたい。四十圓で十分だと云つた。局長はこれに従つて、特に着宿として枳園<sup>きしゆく</sup>を優遇し、土藏の内に畳を敷いて事務を執らせた。此土藏の鍵は枳園が自ら保管してゐて、自由にこれに入した。壽藏碑に『日々入局、不知老之將至、殆爲金馬門之想云』と記してある（その百一）しかしながら、ここから持ち出した本を楊守敬に估却していたことを考えると「金馬門の想い」もブラックジョークのように映る。

※堪欣・・・「堪へたり」と訓む場合と、「堪へんや」と反語の訓み方をする場合がある。唐代以降の詩において、反語の意味を帯びる。〈漢辞海 p307〉

※筭シウは酒、鱗は魚

※岡寛齋 「優の家にあつた岡寛齋も、優に推舉せられて工部省の雇員になつた。寛齋は後明治十七年十月十九日に没した。天保十年生であるから、四十六歳を以て終つたのである。寛齋は生れて姿貌があつたが、痘を病んで容を毀られた。醫學館に學び、また抽齋、枳園の門下に居つた。寛齋は枳園が壽藏碑の後に書して、『余少時曾在先生之門、能知其爲人、且學之廣博、因竊錄先生之言行及字學醫學之諸說、別爲小冊子』と云つてゐる。わたくしは其書の存否を審にしない。寛齋は初め伊澤氏かえの生んだ池田全安の娘梅を娶つたが、後これを離別して、陸奥國磐城平の城主安藤家の臣後藤氏の女いつを後妻に納れた。いつは二子を生んだ。長男俊太郎さんは、今本郷片町に住んで、陸軍省人事局補任課に奉職してゐる。次男篤次郎さんは風間氏を冒して、小石川宮下町に住んでゐる。篤次郎さんは海軍機關大佐である」

澁江抽齋(その九十八)

## 左面

- 1 立之字立夫號枳園。□文化四年生干江戸八亭伊織後改
- 2 養真父爲福山侯醫員。文政四年喪父。時年十五襲父名改
- 3 稚養竹又以醫任。天保八年有故失祿。携祖母慈母及妻子
- 4 遊乎相模。祖母在浦賀而歿。遂歷大磯大山日向而至干津
- 5 久井縣。此間十二年辛苦不可勝言。然樂亦在其中何者半
- 6 儒半醫居則以教授爲業。能讀奇書好聽異聞出則手握刀
- 7 圭無論内外二科或爲收生或整骨請治者莫不施術者

## 裏面

- 1 實事求是頗多發明。又入山采藥下溪釣魚。有桂川詩集、遊
- 2 相醫話。其行樂中、有裨益於正名學者一々筆錄以備後改、既
- 3 及一百餘卷。其他本草經、素、靈、四時經、傷寒、金匱、扁鵲傳、奇



- 4 疾法、並為攷注。弘化五年五月遭本藩赦、再來江戸。十月奉<sub>す</sub>幕
- 5 府命、校勘千金方於醫學館。功竣、賜銀若干。嘉永七年擢為醫
- 6 學館講師。安政五年十二月初謁將軍德川家<sub>之</sub>公。萬延元年
- 7 九月以醫心方校刻成、又賜銀錠。元治元年以學館講書功勞、
- 8 賜月俸。慶應四年七月移居于福山。明治五年五月入東京、補
- 9 文部省十等出仕。後、或入醫學校為編書、或入工學寮為講弁。

右面

1 十二年十二月應大藏省撰、入印刷局以編輯為務不知老

2 之將至。殆作金馬門之想謂以代銘曰

3 萬卷架書不識貧 堪欣恩澤及微臣

4 花前月下存餘樂 杯有新筍盤有鱗

5 明治辛巳秋日 七十五翁養竹子記

6 明治十八年十二月六日歿年七十九 門人 岡 寬齋謹書

左面



裏面



右面

